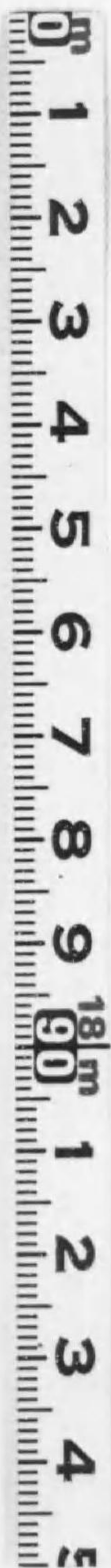
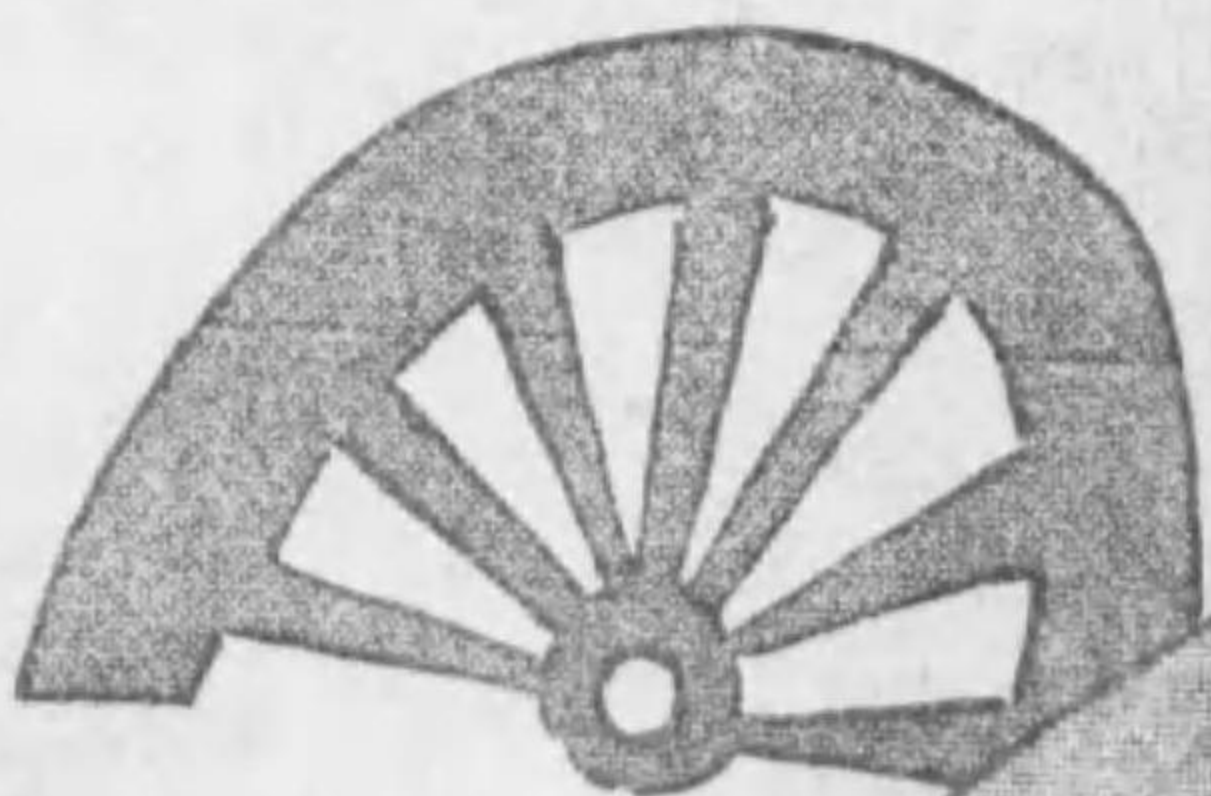


大心習字手紙の文

全



始



持 116
296

いろは愛禮

い
以
乃
詔
命
は
も
と
に
よ
り
後
却
へ
海
と



と
聖
徳
寺
書
り
里
架
奴
惣
る
果
法
鏡
海
を

越水已和加可よと
た多量之礼是能光
可楚曾つ津川澄ぬ
福厚な家物紫帆高
ら良麗む武豊舞う
字为井の能乃此若
机おく之皇久や如
屋ま万ま波戸けと
葺計ふ夫ぬ布と志
取江えて之之借あ

信通西館家遊ぶまき草恭きんぎょ
賀正次々契屋一回多つぎ つぎ つぎ
大馬之遊を重ねる百段けん ちよびひ かさ
少緩神下さるる先を新すゆ しん まづ
身之祝詞まぐて新ねん ねん かくの如くに

少緩神下さるる先を新

右返り

尊翰様後任良由名家名そん かん せい じょう ぶん けい けい
少健全けん ぜん少守存良由名家名けん ぜん ちゆう ぞん じょう ぶん けい けい
身之祝詞まぐて新の如くにみ ねん ねん かく

日毎三笑ひごとくさんごう 誠存まことぞん 仕長しちやう 習なま 出で 放はな 心こころ
 下くだ されされ 後のち 正ただ 易やす 本もと 年とし も相あひ 愛あひ
 らら 長なが 出で 厚あつ 道みち 之の 程ほど 於お 上かみ 長なが 先まづ
 ハ右みぎ 出で 返かへ 言こと 中なか 一ひと 言こと 極たぎ 其その 再また 採と

梅見誘引うめみよびいん 文ぶん

意い 象しやう 未み 去こ 之の 魚うい 匠しやう 入い 出で 記き
 居い 如ごと 何なに 之の 匠しやう 也なり 梅うめ 之の 匠しやう 之の 采さい
 梅うめ 園えん 之の 梅うめ 花はな 可か 奇き 奇き 奇き 奇き 袖そで
 之の 匠しやう 趣そ 友とも 人ひと 之の 匠しやう 承せう 技ぎ
 作つく 然しか 之の 匠しやう 明めい 後のち 日ひ 醒さ 散さん 散さん 矣なり

の多まくく 糸いとるるくく 貴君きくん
少思ぼしるめハハめめハハ 出でるる也やももなな
之こぞぞ少し回わい付つ新しん夜や也や

右返り

貴翰きかん拜さい誦じゆ觀くわん梅ばい之の信しんの

儀ぎ少回しわい意い申しん之の實じつ之の少し也やも
此この友とも之の日ひ耳みみ梅うめ花はな蓄たくをを従したがむ
一いっ日にち散さん策さく杖じやう也やも
之この存ぞん之の長ちやう受じゆ之の後ご之の頑がん也やも
りり飲いん杯ぱい之の也やも 之この也や都と合が合が也やも

弟^{だい}也^{たち}を^{より}考^まあ^らし^ます^まを^はら^しめ^るる^る也^ま様^ま
沙^さ供^{とも}仕^しる^るく^く良^{らい}持^も履^{ふく}

野^の遊^{ゆう}よ^よ人^{ひと}を^を徳^{とく}ふ^ふ文^{ぶん}

拜^{まい}啟^{けい}此^{この}四^し五^ご日^{にち}来^らい^く天^{てん}氣^きと^と
野^の外^{がい}に^に逍^{せう}遥^{よう}を^を思^{おも}ひ^ひ立^たち^ちを^を良^{らい}

愛^{あい}の^の烟^{えん}の^の青^{せい}と^と菜^{さい}と^と花^{はな}の^の黄^{わう}
ある^{ある}皆^{みな}人^{ひと}目^めを^を安^{やす}ま^まし^しむ^むる^る様^{さま}
と^と相^{あい}成^{なる}べ^べし^しと^と存^{ぞん}じ^じを^を就^{じゅう}す^する^る
来^{きた}る^る何^{なに}日^{にち}の^の土^ど曜^{よう}日^{にち}を^を朔^{しやく}し^し花^{はな}
鳥^{すか}山^{やま}邊^{へん}へ^へ糸^{いと}糸^{いと}り^り夜^よ貴^き君^{くん}思^{おも}

の敏勝家と稱せらるる程に成ら
びんわんか せう
 きては極々よるに金身仕立
よま さま
 酒一樽の夢の印まことに進
ひそたる ありが 一も
 道仕立るの交納もこれ程
てい とも なみ
 草と花と
きんく もん

一は小生も近頃遠足をと考
きうせい ちか げん せん ぞく かんが
 え居は杉栖書状を賜り
を あり かり 一よ トよう たま
 程は同日の事あり銭捌き
あり 亦た ぎやう トつ せん ト さーか
 といふ付杉の仕立先を
いん ト あり び
 返事やうえ膝を拝眉のそよ
いん ト あり び

漢の假

昇等を賀す文

トシトシ なたがーラウヂ

セウモウ

友人 素也より 承知致す

トシトシ

せんトウ

せい きん

おんむき

尊君より先日の精神の趣

トシトシ

きん きん

いたり

由 仰等の由 欣轉す

返事

出状 拝誦 山生より 誤り 昇

たう

えい

にが

ま

たう

等 の 紫 を 撥ひ たり 出 候 達

トシトシ

か ひん

たま

一 出 祝 詞 并 候 品 を 下 賜

れい

ま さら 建 難 あり 出 候 申 出 候 事

もと

よりの愚昧の如き備へのに目僚
考及の此厚情より漸く
位置を保ち居り乍次弟を回
の昇進より後より存せざる程
とて汗顔の至り此に對しは程を

此上より出教刊に後ひ飽ますぐ
努力を結ぶべく先を取敢て
略像有るから紙土を以て此厚
禮申上は除く相用とする
等々申傳ふべくは敬復

来^来参^参りて参^参る何日より
開^開業^業仕^仕る^るしき^{しき}續^續りて^て此^此燈^燈の
體^體を^を御^御の^の祝^祝の^の真^真似^似多^多
以^以當^當一^一獻^獻當^當上^上夜^夜當^當當^當
日^日午^午後^後一^一時^時に^によ^より^り参^参來^來臨^臨

之^之程^程瑛^瑛実^実陸^陸波^波一^一良^良敬^敬具^具

右^右返^返事^事

法^法開^開業^業之^之由^由祝^祝也^也一^一之^之由^由招^招
之^之願^願之^之由^由厚^厚情^情之^之程^程有^有之^之
大^大之^之由^由程^程中^中之^之由^由當^當日^日之^之由^由

ひ用子トウコもあまきおくは旨れい何
刻こくすりの西店ミセ相見あひまて毒糸ドクイト銀ぎん
紋もん一いち出言でげん席せきを束すわを汚けが
一申まへまへへとてはたか返事かへじを
除よく拜顔らいがんの上うへ萬まん々々一いちの申

陳ちん兵へい松しょう孫そん

軍艦拜觀くわん之の語ごふ又

拜らい啟けい先般せんぱん中ちゆう一いち話わ申まへら之の旨
帝國軍艦ていこくぐんかん親おん雅あや々々般ぱん某
地ちより當港たうかうへ復航ふくかう以もつ多た一

良由同艦乗組の知人より
昨夜氷をら後一良當分
満堂の様子を付き纏るの
以話もこれありと云々
一沙観艦の出来事なり

先方簡易な夜半
や右返事の内容上

右返事

貴墨様讀は良軍艦
拜觀の像を付き出渡す下

きまきありおごのたぐひの程中一は後
中身多々年身入るるひのけいへ
あご一回も拜聴せしことか
と遺恨と存一は新彼の
海戦と大名参を博したる

何号を見らるる大参交の号
何事我擲きんと時日中確
乞ふ号を必まき出さるる旨
直参様ねがひ出長志中返
事と新の如きは長年

暑中見舞文

酷暑凌ぎ難く乍夏急流
清涼大なる心と良契屋一
回甘き車一消光能生と白
沙安ん下と建後以本年

と徳分若き烈く飛つと折
角立加長とやと此葡萄
葡萄酒の佛國より昨の若
花枝一と付と些少
からと結分と先

水見舞まぐ旬と転々

右返事

来諭らいゆの如ごとく酷暑こくすの多おほく候まうは
しやう祥祿ちんろく重ちゆう之これの過すぎつぎに次つぎに榮さか
か花はなも母ははの美みの消き器き存まかりありある

五枚ごまい念ねん下げの是こゝに後のちに供たて結けつ様さま

なる葡萄酒ぶどうしゆの意い投な下げと礼れい

有ありふたふたと鳴な海うみの多おほく候まう

ら好品こうひん備あつのりなりら半はん餅もち

と一いっへ進しん呈てい仕しに簡かん送そう吐つ留りゆう

母堂様ぼだう有あららままのの驚おどろき
の事こととと此こゝにに申まをすす申まをすす先まづに
此こゝ見み舞ままま申まをすす申まをすす

右返事

仰おほせの如ごとく何なに日ひの死し常じょうの雷らい

鳴なりて母ははを始はじめめ一ひと回かい大おほき
深か岐き一ひと時ときの雷らい後ごにに矣や
此こゝららんんの思おもひひ程ほど々々
此こゝの思おもひひ程ほど々々
何なに事こともも無なくく何なに事こと

出放念はらねんのりきのりたふ後きをたふ言たふすたふ
て右みぎのりみぎ一ひと條ぢょう良よし

死しをを吊つささるる文ぶん

出言しゅげんのりのり文ぶん様やうのりのり先せん頃ころ中ちゆう一ひともも
出痛しゅつうのりのり又また菜さい石いしとと効きうをを言げんすす

せせびび終しゆうのりのり出遊しゅつゆう去こ遊ゆうとと言げんすす我われ
由よし驚おどろかかるる皆みな様やうのりのり出然しゅぜん傷きず
海うみのりのりとと志し志し奉ほう事じりりとと言げんすす志し
出滅しゅつめつとと人ひと生せいとと免めんのりのり出難しゅなんとと言げんすす
出しゅとと言げんすすああままとと言げんすすとと言げんすす内うち

侍は日比の山然情亡文
地は松を吟海侍と
存は長生御涙拜

招草を贈る文

袂すぐと秋風吹くあはれ

友人数筆とあ連き来山
草特を燈はあ又さあ
もも葎復物多々回行り
配分以の長生も終明り

ある次第たひに能くわきまを以て
すそすそおけ
祇分たひに「自晩餐の一助」
も相成たひまじり本懐ほんを遂たひげし
往ふ来らの

た返り

貴書き持もて「昨日きのうの桑山さやま」
持もて「由ゆ何なによ里りの由ゆ」
「ことと「次つぎ」に「存ぞん」
付つき「員いん」中ちゆう「者もの」
と出で通とる「下した」を「深ふか」志し

程有ほどありのたぐ謝いや一奉たてまつり後
早まづ進すす厨ちゆう下かと送りおくり晚酌どんしやくの嬢ぢやう
と伝つたへて先せんも此こゝ程ほどまで中
流りゆう長なが州しゅうと此こゝぞ

志こころを物ものを送おくり届いたげる文ぶん

昨日きのうも此こゝ多おほ忙いそ中ちゆう一ひと語ご々々申まをす
光ひかりを顔かほひ目め交まじり何なにの風情ふうじやうもな
と殊こと々々多おほ人ひと数かずの事こと有あり自然ぜんぜん
西さい條じょう末まつ申まをす此こゝ也なりと斗たう々々申まをす
先せん程ほどの如ごとく此こゝ申まをす也なり

其のせつ そのせつ せき せき かつ かつ
夜更中 席を引づけは又
煙草入の落し切りの中 たごころ いれとりおと か せい ちゆう
お尋ねは又出たの品なり あひ たら き こん 一 なる
と事相分り付は候 こと わか つかひ
持たせは申上り候 も ま ら

手下と身と夜候は候 て み よ あ ひ あ ひ

右返り みぎ へり

昨日 きのう あ ひ ま ご け り
昨日は招き候 まね ま ね ま ね ま ね
思ふ おも おも おも おも おも おも おも
候 あ ひ あ ひ あ ひ あ ひ

四季文例

二月

○新玉の年芽出度申納候○松の内は歌留多よ羽子よと申す内に過
 へて候○日々歌留多雙六と遊び暮しぬ候程に早や學校も始まり申
 候○年立返り候物から未だ寒さの堪難候○軒近き梅や、綻び候○
 田舎にては未だ舊曆を用、よろづの取納など片づき申さず候得は
 改まる年とも覺ず候○門の柳、園の玉椿に、またき春を促し顔に
 候

二月

○初午の祭禮として何處の稻荷も賑ひ居候○春立今朝と相成候○世
 は花鳥の春になり殊に一兩日はしのぎ能相成候○餘寒烈敷候○門
 の柳の糸打煙り春の姿と相成候○鶯の聲遠近に聞へ稍長閑に成染
 め候○今日は近頃が無いと朗かに相成候○雪間の若菜も色見え候

三月

○打續て空も長閑に相成候○昨日の雨にて少しく寒さも薄らき申
 候○御地も此頃は雪名残無ふ解はて嶺の早蕨麓のつくく草など
 折からの御遊山もあるべき頃と相成候○一入春めき申候所○野邊
 は雲雀の聲も打霞申候○春雨しめやかに降り暮し候○草木は漸々

萌出候○歸り行雁につけて一筆申上候○霞かくれに雁もかへり小
田の蛙も鳴初めて身も浮き立つ如くに相成候○花も漸々景色立頃
と相成候○効外の運動には誠に好日に御座候

四 月

○そよ吹風も寒からず花も咲初る時節と相候○空打霞て百千鳥の
囀り暮す此頃の春を家にのみ籠り候は惜き事に候○浦々と霞わた
りて花も咲出申候○何處の花も咲出申候○白雲のかゝらぬ山なく
覺え候○花盛りの頃と相成候籬のものと山吹池の汀の藤も咲そめ
候

五 月

青葉がくれの遅櫻初花よりも珍敷見受候○花も何時青葉となり候
眺涼しくなり候○暑からず又寒からぬ頃と相成候○俄かに暑を催
し候○山の端も霞の衣ぬぎかへて緑涼しき夏の景色と相成候○時
鳥の初音ゆかしくなり申候○漸々薄暑を催し申候○ほのぼのと明
行片山畑の麥の微風何となく心地よく相成候○籬の卯花雪の如く
に出窓近き若竹の卷葉の露心地よき頃と相成候

六 月

○昨日今日も降り續寂しさ遣方なく候○五月雨晴間だになき此日

頃讀書にのみ日を消し居候○軒の若竹をぐらうしげり行ころに相成候○降消す眺はいとゞ物淋く候○時鳥の鳴音も繁く相成候○降る雨に徒草彌増候て只顧御光來を御待致し居候○梅雨の空晴て俄に暑氣を催申候○養蠶の時節と相成候○庭の青梅も色付申候○花橘も香に匂ふて夕べ涼しき時節と相成候

七月

堪難き暑さに相成候○時節とは申しながら金も流る暑と相成候○日に添へ増る暑さ暮難う相成候○日盛は命と頼風も堪候て苦さ一入に御座候○頼む扇の風さへ暖く如何にも暑さ凌ぎ兼候○兎角不

同の氣候にて返て凌よく覺い候○呼べば心地よき夕立まで門出の稻も悉く勢ひよく相成申候○雷の音時々聞い候は夕立の兆と存じ候

八月

○秋立候得共未だ變ぬ暑を殘し候○殘暑さも漸々に薄き申候○朝夕は漸々に暮し能く相成候○虫の音に秋の景色も悟られ候○庭の眞萩も咲初め候間○宵毎の蟲の聲も日に増繁く相成候○秋の夕は何處も同淋しさに候○一葉散る桐の木の間夕月夜寢覺にそよく萩の上風稍秋の景色と相成候○何處と待居門田の稻も花咲みち朝

げの風に打そよぎ候さまを見候へば露も思ふ事なく梅も櫻も是に
は、しかじと頼母敷存候

九月

野邊の千草は錦の如くに候○朝夕は一きは涼しく相成候○律の宿
は殊に露けく覺え候○月の面白さに寝もやらず一夜を明候○何時
か秋も最中となり候て舊き曆の望の夜も近づき候○蟲の聲々おの
が種々泣つれて悲さを感じ申候○野も山も秋の景色と相成候○初
雁の御王章いと嬉敷繰返し拜見致候○梢の色は未淺く候得共

十月

○昨日の雨にて一入冷氣を催し候○朝夕は肌寒う木々の梢も色づ
き申候○露吹風もそゞろに物寒き此の頃如何お消相成候哉○早葺
狩の時節と相成候○漸々秋深くなり候折ふし御さわりもあらせら
れず候や○夜永き頃と相成候○今朝始めて霜結びそめ池水の蓮の
枯葉を吹く風いと寒く候○園生の菊のみ人待顔に咲匂ひ居候

十一月

日に増寒さに向候○紅葉も早散染し冬の景色と相成候○日足も漸
く短く相成候○空はしぐれて晴間も見えず候○霜枯の時節と相成
候○木枯に落葉亂るる冬と相成いとと淋しく相成候○小春の天氣

いと朗かに晴渡候○遠山は早雪白くかゝり候○今日の天長節は天氣も好暖かに誠に心地よく候○日向○水仙は花を催し候頃と相成候

十二月

日に増寒氣を催し候○日に寒さ相加り候○昨日の氷今朝の雪と日々寒く相成候○今朝の初雪は野も山もをしなべて銀世界と相成候○珍らしき初雪にて寒も忘れて物見に出候○寒さをも他所に匂へる窓の下の梅は花の魁けとて此の寒さをも凌ぎて咲出居候○みぞれ交に降雨の音物凄く覺え候○早年の終りと相成候○最早今年

も餘日無之候○暮行年の何となく淋さを増候○忘年の催し致し候間皆々様御揃にてお入せ相成度候○御歳暮の印に御座候○御年迎へ給ふ祝へ事に御用へ賜り度候○年追て來ん春を楽しみ居候○歳暮の雪は又一入の眺めに御座候

居ながら目新らし
き面白き書物を安
く買はれます
左の通り御覽あれ

東京各書籍諸
出版目録一冊

右書目御入用の節
は往復はかきを以
て御甲越し相成度
早速御送り申候

大正貳年六月四日印刷
同 年六月七日發行

複製不許

著筆者 鬘陽居士

發行者 和田庄藏

印刷者 北澤悦

東京市神田區平河町(和泉橋際)

和文寶堂

振替口座
東京一九〇七六

終

